

陸普第三二八九號

九八式投擲機取扱法

昭和十六年五月陸軍省印刷

九二

1456

1457

陸普第三二八九號

九八式投擲機取扱法規定ノ件達

九八式投擲機取扱法別冊ノ通定ム

昭和十六年五月六日

關係陸軍部隊

陸軍大臣 東條英機

九八式投擲機取扱法

目次

総説	一頁
第一章 構造及機能	一頁
第一節 筒	一頁
第二節 基板	二頁
第三節 距離変換具	三頁
第四節 止杭	三頁
第五節 属品	三頁
第二章 取扱	三頁
第一節 組立分解	五頁
第二節 運搬	五頁
第三節 投擲準備	六頁
第一款 抛射薬	七頁
第二款 投擲機ノ据附	七頁
目次	八頁

1458

第四節 投擲實施

第五節 特ニ注意スベキ事項

第三章 保存

第一節 手入

第二節 保存

附表第一

九八式投擲機ニ依ル
投擲爆裂罐投擲標準距離表

附表第二

九八式投擲機ニ依ル
投擲爆裂罐投擲標準距離曲線圖

附表第三

九八式投擲機ニ依ル
羽付破壊筒投擲標準距離表

附表第四

九八式投擲機ニ依ル
羽付破壊筒投擲標準距離曲線圖

附圖第一

其ノ一 九八式投擲機全体

其ノ二 同

其ノ三 同

附圖第二

其ノ一 第一号箱入組要領

其ノ二 第二号箱入組要領

附圖第三 馱載要領

附圖第四 臂力運搬要領

附圖第五

其ノ一 九八式投擲機据附要領

其ノ二 九八式投擲機据附要領

其ノ三 中蓋ヲ敷キ基板ヲ据附ケタル要領

其ノ四 土囊ヲ以テ基板ヲ据附ケタル要領

附圖第六 投擲機裂縫ノ裝填要領

附圖第七 羽付破壞筒ノ裝填要領

附錄

第一 投擲機裂縫

總說

第一節 構造及機能

第二節 組立分解

目次

1461

九八式投擲機取扱法目次終

第三節 保存	一九
第二節 羽付破壊筒	
総説	
第一節 構造及機能	二〇
第二節 組立分解	二四
第三節 注意事項	二六
第四節 保存	二六
第三節 導火索点火管	
総説	
第一節 構造及機能	二七
第二節 保存	二八
第四節 点火マツテ	
総説	
第一節 構造及機能	二九
第二節 保存	二九

九八式投擲機取扱法

総説

第一 九八式投擲機ハ抛射薬ニ依リ投擲爆裂罐、羽付破壊筒、投擲發煙筒等ヲ投擲スルニ用フ

第二 九八式投擲機(以下本機ト稱ス)ニ依ル投擲爆裂罐、羽付破壊筒ノ投擲標準距離附表第一乃至第四ノ如シ

第三 火薬火具ノ取扱ニ関シテハ以下示ス外総テ爆破教範ニ拠ル

第一章 構造及機構

第四 本機ハ筒、基板、距離交換具、止杭及屬品ヨリ成リ全重量約八四斤ニシテ総テ箱ニ收入ス(附圖第一、其ノ一、其ノ二、其ノ三)

主要諸元左ノ如シ

筒、身長	六五糎
口徑	五糎
重量	筒 七斤四 基板 一五斤

総説 構造及機能

1462

最大投擲距離

投擲爆裂罐 約四〇〇米
羽付破壊筒 約二九〇米

投擲角

高低 四〇度ノ一定トス
方向 左右各一〇度

第一節 筒

第五 筒ハ筒身、筒底、脚取付環、点火紐甲、乙及脚ヨリ成リ重量約七疋四トス

第六 筒身ハ砲身、鋼製円筒ニシテ点火孔、点火孔蓋竝ニ口縁ニ照準用ノ溝ヲ有ス

点火孔ハ点火「マツチ」(若クハ縱燃導火索)ヲ挿込ム孔トス

点火孔蓋ハ点火「マツチ」ヲ抑ヘ保持スルモノトス

照準用ノ溝ハ脚取付環ノ上部ニ在ル溝ト共ニ投擲方向ヲ照準スルニ用フ

第七 筒底ハ筒身ノ底部ヲ構成シ之ニ依リ筒ト基板トヲ結合スルモノトス

第八 脚取付環ハ筒身ノ中央部ニ嵌メ脚ヲ結合スルモノニシテ照準用ノ溝及点火紐取付用ノ止板ヲ有ス

第九 点火紐甲ハ長さ約三米ニシテ一端ニ鉤ヲ有シ点火「マツチ」ヲ發火セシムルニ用フ

第十 点火紐乙ハ長さ約五〇糎ニシテ一端ニ鉤ヲ有シ他端ヲ点火紐取付用ノ止板ニ結附ケ投擲物ノ点火管ヲ發火セシムルニ用フ

第十一 脚ハ脚取付環ニ取附ケラレ下部ヲ基板ニ結合シ筒身ヲ支持スルモノニシテ筒身ニ約四〇度ノ一定高低角竝ニ

左右各一〇度以内ノ方向角ヲ附與スルモノトス

第三節 基板

第十二 基板ハ長サ約八〇糎、幅約三五糎、重量約一五疋ニシテ中央部ニ筒身受ヲ亦前端ニ脚止「ボルト」ヲ有ス

第三節 距離変換具

第十三 距離変換具ハ取付環、標尺及止ねぢヨリ成リ取付環ニ依リ筒身ノ口縁ニ取附クルモノニシテ標尺ヲ伸縮シテ投擲物体ノ投擲距離ヲ増減スルモノトス
標尺ハ投擲物体ノ筒身腔内ニ入ル長サヲ制限スルモノニシテ〇ヨリ六〇迄ノ目盛ヲ有ス

第四節 止杭

第十四 止杭ハ基板ヲ地面ニ固定スルモノニシテ長サ五五糎、重量約二疋九トス

第五節 属品

第十五 属品ハ左ノ品目員数ヨリ成ル

品	目	員数	構造	並	ニ	用途

構造及機能

三

1464

火 具 箱	工 具 袋	火 具 挾 布	止 杭 袋	筒 口 覆	垂 球	ペ ン チ	薬 斗	手 入 棒	洗 桿
一	一	一	四	一	一	一	一	一	一
火具挾布及点火「マツチ」ヲ收入ス	一 綿布製袋ニシテ「ペンチ」、七耗柄付ねぢ同、点火紐甲、点火紐乙ニテ「マツチ」ヲ收入ス	一 綿布製ニシテ点火具（雷管、緩燃導火索、導火索点火管相互ヲ接続セルモノ）ニテ六箇ヲ收入ス	四 綿布製袋ニシテ止杭ノ兩端ニ嵌メ止杭ヲ携行スルニ用フ	一 綿布製ノ円筒形袋ニシテ筒身口ヲ被フモノトス	一 投擲目標ノ照準並ニ基板ノ水平ヲ点檢スルニ用フ	一 鉄線ノ切断ニ使用ス	一 伸縮スル黄銅製円筒ニシテ小粒薬ヲ計量スルニ用フルモノトス 伸縮筒ハ五瓦ヨリ五〇瓦ニ至ル五瓦單位ノ目盛ヲ有ス	一 一端ニ布ヲ結附ケ筒身腔内ノ手入ニ用フルモノニシテ甲、乙ニテヨリ成ル	一 筒身腔内ノ手入ニ用フルモノニシテ刷毛及柄ヨリ成ル 柄ハ甲、乙ニテヨリ成リ之ヲ接続使用ス

四

藥 發 箱	一	拋射藥ヲ收入ス
距離變換具箱	一	距離變換具ヲ收入ス
第一号箱	一	基板、筒、洗桿、手入棒ヲ收入スルモノニシテ駄載ニ適ス
第二号箱	一	第一号箱收入品以外ノ部品及属品ヲ收入スルモノニシテ駄載ニ適ス
七耗柄付ねぢ回	一	投擲爆裂罐ヲ結合スルニ使用ス
十耗柄付ねぢ回	一	

第二章 取扱

第一節 組立分解

第十六 本機ハ筒、基板、距離變換具、止杭、属品ニ分解シ第一、第二号箱ニ分割收入スルモノトス（附圖第二、其ノ一、其ノ二）

第十七 本機ノ組立ハ概ネ左ノ順序ニ依ル

取扱

一 基板ヲ平ニ置キ蝶形「ナット」ヲ十分緩メ止「ボルト」ハ基板ノ中心ヨリ左右各六種(白線ヲ以テ標示ス)ノ位置ニ置ク

二 基板ノ側面ニ位置シテ脚ヲ前方ニ向ク如ク筒ヲ持テ筒底ノ球頭部ヲ基板ノ筒身受、切欠部ヨリ筒身受ニ嵌込ミタル後筒ヲ約九〇度廻ハス

三 脚ヲ止「ボルト」ニ嵌込ミ蝶形「ナット」ヲ締メテ固定ス

四 距離変換具ヲ筒身ニ取附ク

第十八 分解ハ組立ト概ネ反對ノ順序ニ行フモノトス

第二節 運搬

第十九 筒(筒身、筒底及脚)ハ通常分解セザルモノトス

又筒ト基板トヲ分解シタルトキ止「ボルト」ハ移動セザル如ク蝶形「ナット」ヲ輕ク緊メ置クモノトス

第二十 本機ノ運搬ハ駄載又ハ車載ニ依ル

其ノ數量次ノ如シ(附圖第三)

駄載 一駄ニ付 一機

輜重車 一輛ニ付 二機

自動貨車 一輛ニ付 二〇機

第二十一 臂力ニ依リ運搬スルトキハ筒ト基板トヲ分離シテ行フモノトス(附圖第四)

但シ近距離ノトキハ筒ト基板トヲ結合シタルママ運搬スルコトヲ得
此ノ場合距離変換具ハ筒身ヨリ取り外シ距離変換具箱ニ收メテ運搬スルモノトス

第三節 投擲準備

第二十二 投擲準備ハ通常投擲物体及火具ノ準備並ニ投擲機ノ据附トス
準備作業ノ良否ハ投擲實施ニ甚大ナル影響ヲ及ボスモノニシテ特ニ火具ニ関シテハ不発ノ基因トナルノミナラズ危害
ヲ伴フコトアルヲ以テ十分点檢シ機能良好且正確ナラシムベシ

第二十三 投擲物体及火具ニ関シテハ附録ニ示ス

第一款 抛射藥

第二十四 抛射藥ハ通常二五瓦及三五瓦ノ二種トシ絹布製藥ニ小粒藥ヲ填實スルモノニシテ其ノ製作要領次ノ如シ

一 幅約五釐(並幅物ニ在リテハ四ツ裂、大幅物ニ在リテハ六ツ裂ヲ適當トス)長サ概ネ次表ニ示ス円筒形ノ絹布製

藥ヲ作ル

各縫合セハ藥粒ノ漏出セザル如ク綿密ニスベシ

藥	量(瓦)	藥ノ長サ(釐)
	二五	三五
	七五	八五

取扱

七

二 藥斗ヲ以テ小粒藥ヲ計量シ、藥ニ填実シタル後、絹糸ニテ揺ル

第二十五 藥袋ハ特ニ防濕ニ注意シ、藥袋箱ニ收入シテ運搬スルモノトス

第二款 投擲機ノ据附

第二十六 投擲機ノ据附ノ良否ハ命中ニ影響スルコト甚大ナルヲ以テ、堅固ニ固定スルコト特ニ緊要ナリ

故ニ据附ニ方リテハ堅硬ナル地盤ヲ選定スルハ勿論、基板ノ下ニ板ヲ敷キ止杭ヲ以テ固定シ、尙要スレバ土袋ヲ以テ基板ヲ抑ヘル等情況ノ許ス限リ可及的ニ堅固ナラシムヘシ

第二十七 投擲機ノ据附ハ左ノ順序ニ依ル(附圖第五、其ノ一乃至其ノ四)

一 投擲機(筒ト基板)ヲ組立テル

此ノ際筒ノ軸線ハ基板ノ中心線ニ一致セシムル如クス

二 据附ケントスル場所ヲ概ネ水平ニ地均シス

三 筒身ノ方向ガ投擲目標ニ概ネ一致スル如ク投擲機ヲ置キ、基板ヲ水平ニス

基板ノ水平ヲ点檢スルニハ脚ノ叉部垂球鉤ニ垂球ノ懸環ヲ懸ケテ垂球ヲ吊シ、垂球ノ尖端カ基板ノ孔ニ一致スレバ可ナリ

止杭ヲ以テ基板ノ前後部四隅ヲ固定ス

四 筒身ヲ正シク投擲目標ニ一致セシメ脚ヲ固定ス、之ガ爲垂球ヲ垂シテ照準用ノ溝ガ目標ニ一致スル如ク筒ヲ規正ス

五 距離変換具ヲ筒身ニ取附ク

此ノ際取付環ノ上面ノ溝ヲ筒身口縁ノ照準用溝ニ一致セシムベシ

第二十八 敷キ土地ニテハ基板ノ下ニ厚板(第二号箱ノ中蓋ヲ利用ス)ヲ敷クヲ可トス此ノ際厚板ノ中心ヲ基板ノ筒身受部下概ネ一致セシムルコト竝ニ厚板ノ上面ヲ地表面ト同ジニスルヲ可トス

第二十九 岩石地等ニシテ止杭ヲ以テ固定シ能ハザル場合或ハ情況ニ依リ止杭ヲ使用シ得ザルトキハ基板ノ上ニ板ヲ敷キ土囊ヲ積ミ重ネテ基板ヲ抑ヘルモノトス

第三十 凍結地ニ於ケル投擲機ノ据附法概ネ次ノ如シ

零下摂氏四〇度附近ニ在リテハ基板ノ下ヲ少シク掘リ杭ヲ以テ固定スルカ又ハ基板ノ周囲ニ表土ヲ盛り之ニ水ヲ注ギテ凍結セシム水無キ場合又零下攝氏二〇度以上ニ在リテハ止杭ヲ以テ爲シ得ル限り固定シタル上尙土囊ヲ以テ基板ヲ抑ヘル

第四節 投擲実施

第三十一 投擲実施ハ概ネ左ノ順序ニ依ル(附圖第六、第七)

一 抛射薬ノ裝入

二 投擲物体ノ安全栓ヲ離脱若クハ点火具ノ取附

三 投擲物体ノ裝填

四 投擲物体ヲ発火姿勢ニ移ス

取扱

五 点火「マツチ」ノ取附

六 点火

七 投擲後ノ筒身手入

第三十二 抛射薬ノ装入

所要ノ薬囊ヲ筒身口ヨリ入レ筒底ニ接スル迄手入棒ヲ以テ静カニ押込ムモノトス
若シ薬囊ヲ二筒以上組合セ使用スルトキハ大ナルモノガ筒底ニ在ル如ク先ニ入レルモノトス

抛射薬ノ装入ニ方リテハ薬囊カ筒身ノ点火孔ニ接近シ得ル姿勢



ニシテ押込ムモノトス

是薬囊ヲ横ノ姿勢



ニシテ押込メバ筒身ノ底部ニ偏シ薬囊ト点火「マツチ」トノ距リ大トナリ

点火「マツチ」ノ火焰ガ薬囊ニ達セズ不着火トナルコトアレバナリ

特ニ二五瓦薬囊一筒ヲ使用スルトキニ於テ然リ

第三十三 投擲物体ノ安全栓ヲ離脱若クハ点火具ノ取附

羽付破壊筒ハ装填直前ニ於テ信管ノ安全栓ヲ拔取ル

又投擲機裂罐ハ点火具(雷管ト総燃導火索ト導火索点火管トヲ接続シタルモノ)ヲ取附ケルモノトス

第三十四 投擲物体ノ装填

筒身ノ側方ニ位置シ兩手ニテ投擲物体ヲ持テ筒内ニ入レル

其ノ要領ハ羽付破壊筒ハ距離变换具受ヲ又投擲爆裂罐ニ投擲發煙筒ハ柄保持筒ノ鏢ヲ筒身ノ前端（距離变换具ヲ使
用スルトキハ標尺ノ前端）ニ接スル迄挿込ムモノトス

此ノ際身体ヲ筒身ノ直前ニ出シテ操作スベカラズ

第三十五 投擲物体ノ發火姿勢

投擲爆裂罐ニ投擲發煙筒ハ装填終レバ投擲機ノ点火紐乙ノ鉤ヲ点火具ノ引糸ニ掛ケルモノトス
此ノ際点火具ノ引糸ヲ強ク引クベカラズ

第三十六 点火「マツチ」ノ取附

点火「マツチ」ヲ筒身ノ点火孔ニ挿込ミ点火孔蓋ヲ以テ之ヲ抑ヘ引糸ニ点火紐甲ノ鉤ヲ掛ク

第三十七 点火

点火紐甲ヲ引ク

第三十八 投擲後ノ手入

一發投擲セバ洗桿ヲ以テ筒身内ヲ手入シ燼渣ヲ除去ス
投擲數概ネ五發毎ニ水ヲ含マシタル洗桿ヲ以テ手入スルカ又ハ筒身ヲ水洗ヒスルヲ可トス
水ヲ使用シタルトキハ乾キタル布片ヲ以テ十分拭淨シ水ヲ除去スルコト緊要ナリ

取扱

第五節 特ニ注意スベキ事項

第三十九

投擲実施ニ方リ嚴守スベキ事項左ノ如シ

一 投擲爆裂罐用点火具

雷管ト緩燃導火索ト導火索点火管トノ接続ニ付テ

緩燃導火索ト雷管トヲ接続シ口縮メシタル後其ノ口縮部ニハ必ズ「ゴム」綿帯ヲ数回巻キ附ケテ導火索点火管並ニ筒身ヨリ噴ク拋射藥ノ火焰及爆燃「ガス」ガ直接雷管ニ入ラザル如クスルコト

是導火索点火管並ニ拋射藥ノ火焰及爆燃「ガス」ガ直接雷管ニ入ルトキハ爆裂罐ハ点火ト同時ニ投擲機直前ニ於テ爆發スレバナリ

二 拋射藥(小粒藥)ヲ濕ラスベカラズ

雨天使用ノ際又ハ投擲機筒身ヲ水洗ヒシタルトキハ筒身内ヲ乾キタル布片ヲ以テ入念ニ拭淨シ筒底ニ水滴ヲ殘スベカラズ

是拋射藥ガ濕ルト不著火、爆連ノ變化又ハ不完爆燃ヲ生ジ投擲物体ノ命中精度惡クナルノミナラズ所定ノ距離

ニ投擲シ得ザルカ或ハ投擲機直前ニ落下スルコトアリテ危害ヲ生ズレバナリ

三 筒身ノ手入ハ入念ニシテ各發毎ニ実施スベシ

四 拋射藥ノ装入ニ方リテハ投擲手ハ必ズ筒身内ヲ点檢シ水滴ノ殘リ又ハ藥囊ノ燃殘リノ無キコトヲ確認シタル後装入スベシ

- 是水滴殘ルトキハ二項ニ示シタル危害アリ又藥囊ノ燃殘リ(手入ヲ忘レルト火氣ノ付イタ藥囊ノ燃殘リアリ)ノ爲抛射藥ノ裝入ト同時ニ發火スルコトアリ
- 五 酷暑時炎天ニ於テ抛射藥量大ナルモノヲ連続使用スルトキハ投擲手ハ時々筒身ノ過熱度ヲ点檢スベシ
是筒身過熱(素手ヲ觸レ得ザル程度ノ熱)セルトキ抛射藥ヲ裝入セバ抛射藥ハ不時發火スルコトアリ
故ニ過熱シ易キ情況下ニ於テ使用スルトキハ屢々筒身ヲ水洗ヒスルカ又ハ水ヲ浸シタル布片ヲ以テ筒身(点火孔附近下部)ヲ冷却スベシ
- 六 抛射藥裝入後ハ絶對ニ筒ノ直前ニ出ルコト及横切ルコトヲスベカラズ
又抛射藥ノ裝入、投擲物體ノ裝填ノドキハ必ず投擲機ノ側方ニ位置シテ操作スベシ
是不時ノ發火ニ依ルル危害豫防上必要ナレバナリ
- 七 点火「マツチ」ヲ引糸、投擲爆裂罐ノ点火具(導火索点火管)投擲發煙筒ノ点火具ノ各引糸ト引紐トヲ接グトキハ引糸ヲ強ク引クベカラズ
又引糸ト引紐トヲ接ギタルママ投擲機距離變換具ノ標尺ヲ延バスコトヲスベカラズ
是引糸ヲ引キ不時發火スルコトアレバナリ
- 八 不着火トナレル点火「マツチ」ヲ取り替ニ際シテハ十分注意シ顔ヲ点火孔ノ上ニ出スベカラズ
是「マツチ」ヲ拔取ニ於テ燃殘リノ火粉ガ落下シテ抛射藥ヲ發火セシムルコトアレバナリ
- 九 羽付破損筒信管ノ安全栓ハ裝填直前ニ取ルベシ
又安全栓ヲ取りタル後安全羽ヲ回轉スベカラズ

取扱 保存

是信管ノ機能ヲ不良ナラシメ或ハ不時發火ノ原因トナルコトアレバナリ

十 羽付破壊筒ノ羽及信管ノ安全羽ハ変歪セシムベカラズ

是羽変歪セルモノハ彈道性著シク不良トナルヲ以テナリ

十一 投擲物体ハ土砂ノ附キタル儘裝填スベカラズ

是筒身腔内ヲ廢滅損傷スレバナリ

十二 羽付破壊筒ニ對シテハ拋射藥(小粒藥)五〇瓦以上ハ決シテ使用スベカラズ

是管体抗力ノ關係上制限セラルレバナリ

十三 投擲爆裂罐ニ對シテハ拋射藥(小粒藥)一〇〇瓦以上ハ使用セザルヲ可トス

是投擲爆裂罐ノ抗力不十分ニシテ破損シ易ケレバナリ

十四 九八式投擲機ニ對シテハ拋射藥(小粒藥)一二〇瓦以上ハ使用スベカラズ

是筒身ノ抗力ノ關係上制限セラルレバナリ

第三章 保存

第一節 手入

第四十 筒身ノ手入ハ拋射藥ノ殘渣並ニ水滴ヲ入念ニ除去スルモノトス
手入ニ際シ土砂ヲ筒身内ニ入レルベカラズ

- 1 手入棒ヲ直接地上ニ置クト土砂附著スルヲ以テ必ず板若クハ蕈ノ上ニ置クコト必要ナリ
- 2 投擲物体ヲ裝填スルニ方リテハ土砂ヲ良ク拭淨スベシ
- 3 砂塵ノ飛散スルトキハ筒身ノ手入ヲ入念ニスルハ勿論覆又ハ布片ヲ以テ筒身内ニ砂塵ノ入ラザル如クスルモノトス

第四十一 使用後ハ土砂ヲ除去シ清淨スベシ

筒身内ハ入念ニ水洗ヒシタル後乾キタル布ヲ以テ十分拭淨シ「スピンドル」油ヲ塗施スベシ
筒底ノ球頭部並ニ基板ノ筒身受ニ給油スルモノトス

第四十二 極寒時ニ於ケル筒身ノ手入バ次ノ混合液ヲ使用スルモノトス

グリセリン	二
水	一
礬	少量
砂	少量

第二節 保存

第四十三 筒身腔ハ數回洗滌シ完全ニ塵渣ヲ除去シタル後「ベトロラタム」ヲ施スベシ

筒底球頭部、基板筒身受ハ手入後「ベトロラタム」ヲ施スモノトス、

第四十四 格納ニ方リテハ各部ヲ手入シさび止ヲ十分施シタル後箱ニ收入納置スルモノトス

保存

1477

九八式投擲機取扱法
終

一

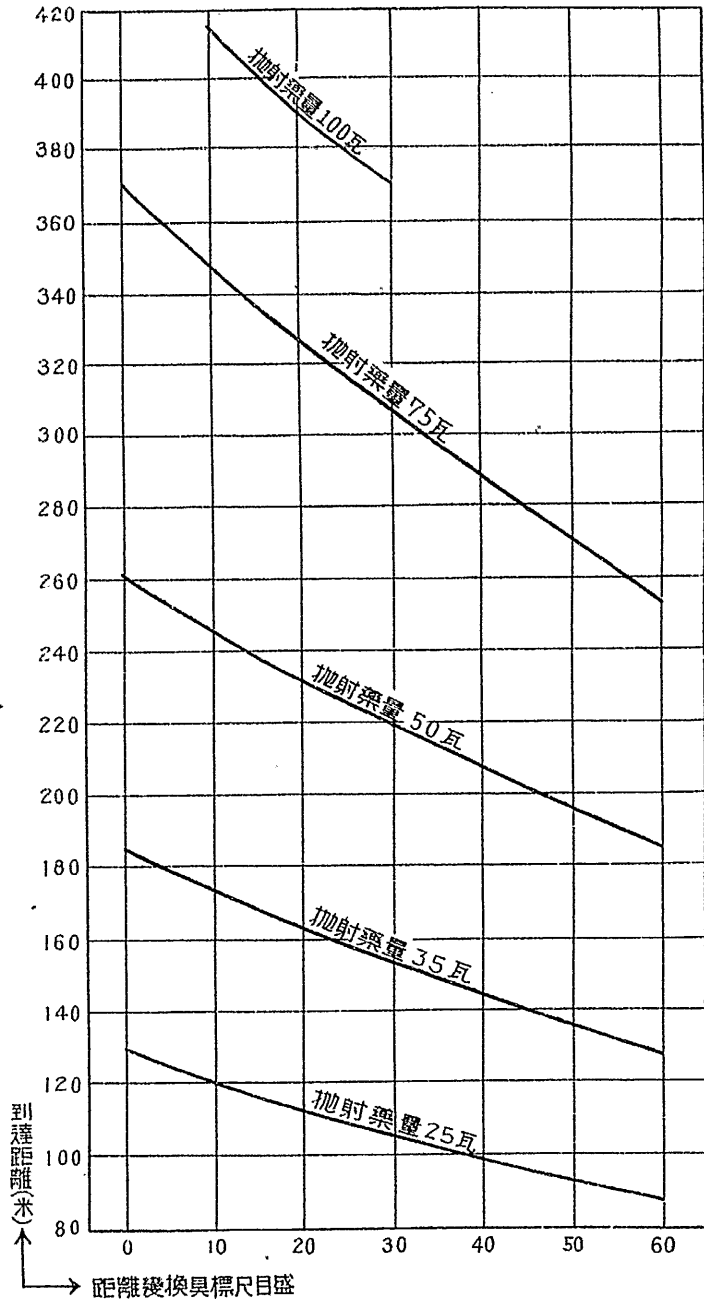
附表第一

九八式投擲機ニ依ル投擲爆裂罐投擲標準距離表						
到達距離 (米)	抛射薬量 (瓦)	距離変換具 標尺目盛	半 数 必 中 界		経過時間 (秒)	摘 要
			距 離 (米)	方 向 (米)		
88	25	60	4.3	0.9	5	投擲爆裂罐全備重量6.4斤トス
93		50				
99		40				
105		30				
112		20				
120		10				
130		0				
129	35	60	5.5	1.0	6	
137		50				
146		40				
154		30				
163		20				
173		10				
185		0				
185	50	60	6.5	1.5	7.5	
196		50				
208		40				
220		30				
232		20				
246		10				
261		0				
253	75	60	11.8	2.5	8.5	
271		50				
289		40				
308		30				
328		20				
348		10				
370		0				
370	100	30	22.2	4.5	10	
390		20				
414		10				

6471

圖線曲離距準標擲投罐裂爆擲投ル依機擲投式八九

附表第二



1480

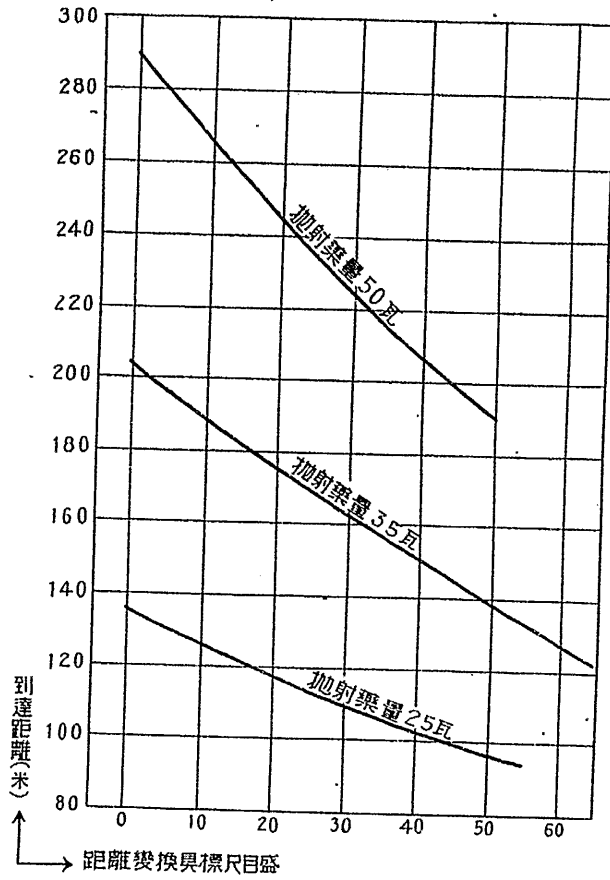
附表第三

九八式投擲機ニ依ル羽付破壊筒投擲標準距離表						
到達距離 (米)	距離変換具 標尺目盛	抛射薬量 (瓦)	半数必中界		経過時間 (秒)	摘 要
			距 離 (米)	方 向 (米)		
96	50	25	5.5	0.68	5	全備重量 8.5kg トス
103	40					
110	30					
117	20					
126	10					
135	0					
127	60	35	6.5	1.2	6	
139	50					
151	40					
163	30					
175	20					
188	10					
204	0					
190	50	50	9.5	1.6	7	
206	40					
224	30					
244	20					
266	10					
290	0					

1481

圖線曲離距準標擲投筒破付羽依機擲投式八九

附表第四



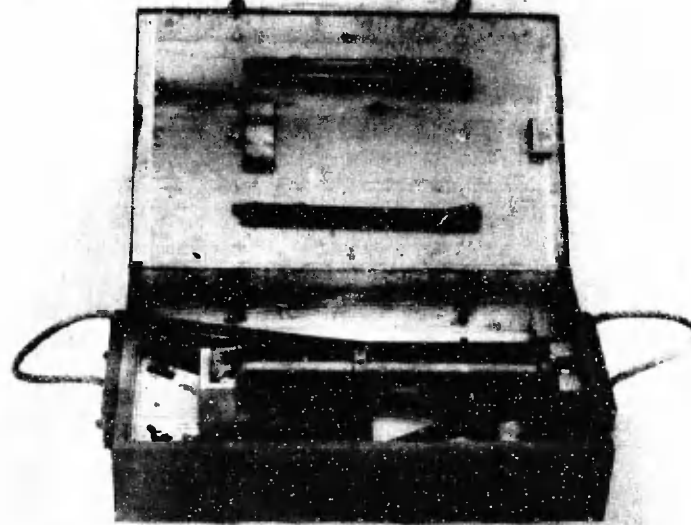
1483

附圖第一 其ノ三



第一号組入要領

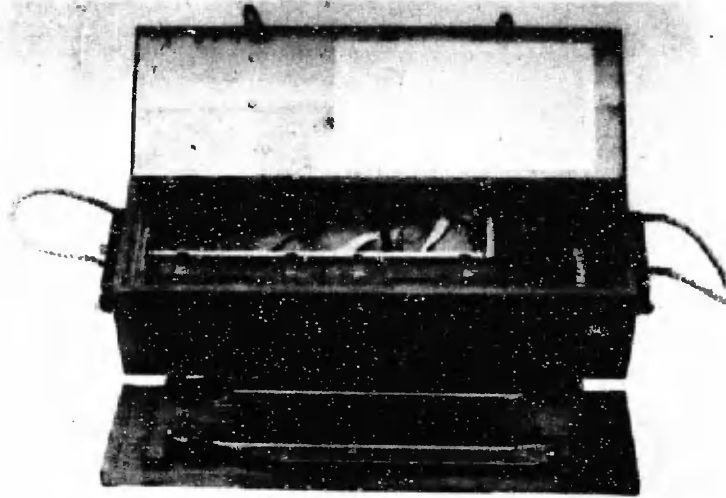
附圖第二 其ノ一



1484

領要組入箱号二第

附圖第二 其ノ二



領 要 載 駄

附圖第三



1485

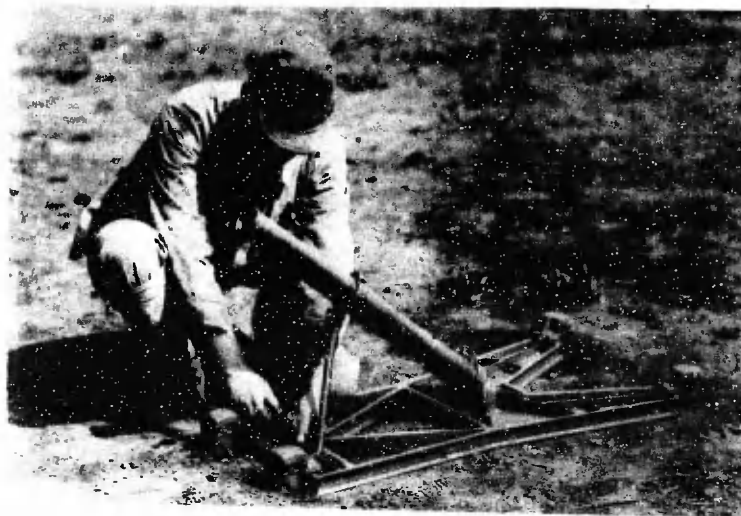
附圖第四

領要搬運力^上啓



附圖第五 共ノ一

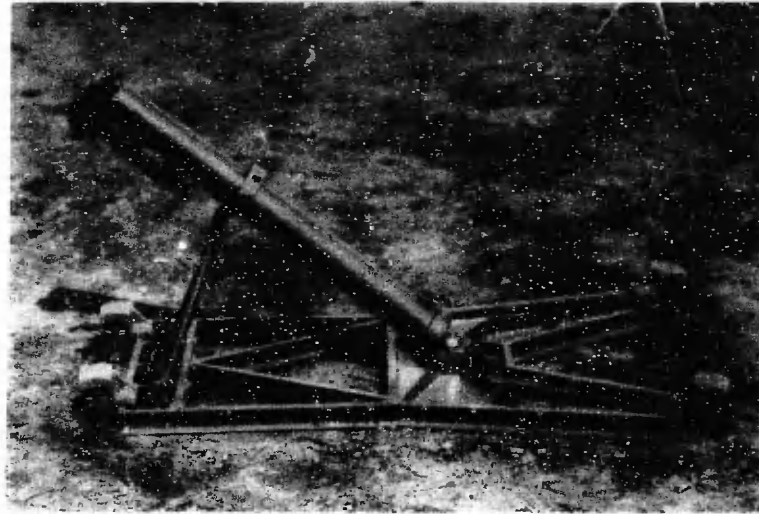
領要附据機擲式八九^{五ノキヲ}



1486

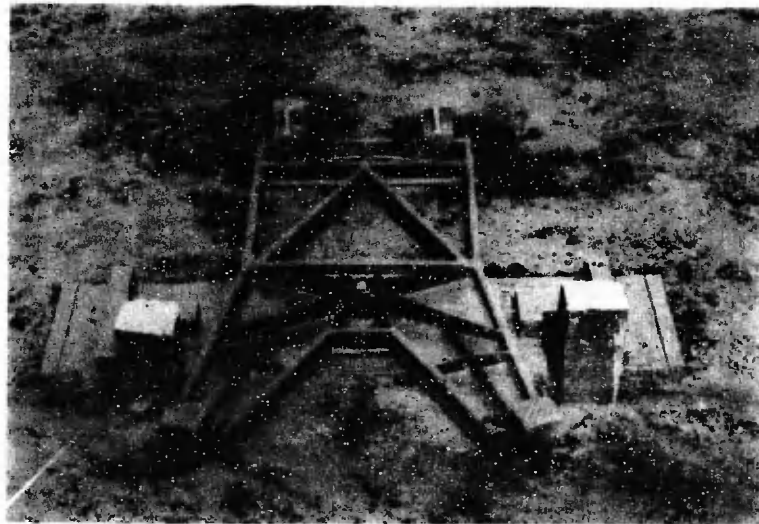
成 完 附 ^エ指

附圖第五
其ノ二



領要ルタケ^エ附据ヲ板基キ敷テ蓋中

其ノ三



1487

領要ルタケ^{エス}附据チ^{ウノ}板基ヲ以テ^土囊



附圖第五其ノ四

領要填装ノ^{ンテウツ}離裂爆^{ンカツレクバクテウト}轟投

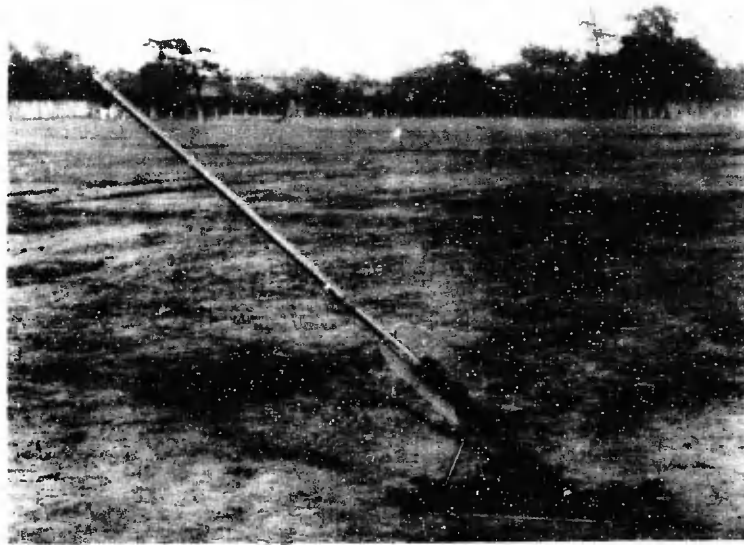


附圖第六

1488

ンテウツ ウトイカハ キツネー
領要塩装ノ筒壊破付羽

附
圖
第
七



九八式投擲機取扱法附録

第一 投擲爆裂罐

総説

第一 投擲爆裂罐ハ九八式投擲機ヲ以テ投擲セシムルモノニシテ突撃直前ニ於ケル敵ノ制壓ニ使用ス

第一節 構造及機能

第二 投擲爆裂罐(以下本爆裂罐ト称ス)ハ罐、底蓋及柄ヨリ成リ炸薬ヲ填充ス(第一圖、其ノ一、其ノ二) 主要諸元次ノ如シ

全長	約七〇糎
幅、高さ	各一二糎
罐体ノ厚サ	三・二糎
炸薬	方形黄色薬二疋四〇〇
重量	約四 疋(除炸薬)
	約六疋四〇〇(炸薬共)

附録 投擲爆裂罐

1489

投擲距離

近極限約 九〇米(拋射藥二五瓦使用)
遠極限約 四一〇米(拋射藥一〇〇瓦使用)

第三 罐ハ鋼板製匣ニシテ側面ニ帶板ヲ有シ之ニ依リ底蓋ヲ結合スルモノトス

第四 底蓋ハ罐ノ蓋ヲ成シ柄ヲ保持スルモノニシテ中央ニ柄ノ保持筒ヲ又其ノ兩側ニ雷管挿入孔ヲ有ス

第五 柄ハ木製ニシテ一端ニ帽ヲ有シ他端ハ底蓋ノ柄保持筒ニ挿入固定セラルルモノトス

第二節 組立分解

第六 本爆裂罐ノ組立ハ概ネ左ノ順序ニ依ル

一 罐ニ方形黃色藥ヲ裝填ス

第二圖ノ如ク藥包四箇ヲ併列シテ六層ニ重ネルモノトス

底蓋ノ雷管挿入孔ニ對應スル部ノ方形黃色藥包ニハ豫メ藥包穿孔器ヲ以テ雷管室ヲ設ケ置クモノトス

雷管室ノ深サハ概ネ雷管ノ長サト同ジニスルヲ可トス

藥包ト罐側壁トノ間ニ隙ヲ生ジタルトキハ厚紙等ヲ入レテ藥包ノ動搖ヲ防グモノトス

二 底蓋ニ柄ヲ取附ク

柄ハ帽ヲ附セザル一端ヲ底蓋ノ柄保持筒ニ挿入シ木ねぢヲ以テ固ク締附ク

此ノ際柄ハ傾ムクコトナク垂直ニ取附ケルモノトス

三 罐ト底蓋トヲ結合ス

底蓋ノ雷管挿入孔ヲ薬包ノ雷管室ニ合致スル如ク底蓋ヲ罐ニ被セ罐ノ側面ニ在ル帯板ヲ嵌メ小ねぢヲ以テ固定ス

四 点火具ノ取付

雷管部ヲ底蓋ノ雷管挿入孔ヨリ薬包ノ雷管室ニ十分挿込ミタル後細キ鉄線又ハ糸ヲ以テ導火索點火管ノ被筒部ヲ底蓋ノ柄保持筒ノ切欠部ニ十分固ク縛附ケルモノトス(第三圖)

第七

点火具ハ爆裂罐一箇ニ對シ必ず二箇ヲ取附ケルモノニシテ其ノ取附ケハ投擲直前ニスベシ

1 綫燃導火索ヲ投擲スベキ距離ニ應ジ六乃至八種ニ切ル

2 綫燃導火索ノ一端ニ雷管ヲ接続シ口縮メシタル後接続部ニ「ゴム」綿帯ヲ数回巻キ附ク

是導火索點火管竝ニ投擲機抛射藥ノ火焰及爆燃「ガス」方直接雷管ニ入ルヲ防グ爲ナリ

3 綫燃導火索ノ他端ニ導火索點火管ヲ接続シ(其ノ要領ハ雷管ト綫燃導火索トノ接続方法ニ準ズ)防水ノ要アルトキハ接続部ニ「ゴム」綿帯ヲ巻クモノトス

第八 点火具ハ火具挾布ニ入レ更ニ火具箱ニ收入携帶スルモノトス

第九 分解ハ概ネ組立ト反對順序ニ行フモノトス

第三節 保存

第十 本爆裂罐ハ罐ト底蓋トヲ結合シ柄ハ取附ケルコトナク分離シテ格納スルモノトス

附録 羽付破裂筒

第十一 罐(底蓋共)ハ雨露ヲ避ケ変形セザル如ク積ミ重ネ置クモノトス
 柄ハ日光ノ直射ヲ避ケ通氣ヲ良クシ濕氣ヲ含マザル如クシテ格納スベシ
 是日光ノ直射竝ニ濕氣ヲ蒙ルトキハ柄ハ変歪ス
 柄ノ変歪セルモノハ彈道性著シク悪クナルノミナラズ筒身ニ挿入裝填不能トナルヲ以テナリ

第二 羽付破壊筒

総説

第一 羽付破壊筒ハ九八式投擲機ヲ以テ投擲セシムルモノニシテ鉄條網竝ニ輕掩蔽部等ヲ破壊スルニ使用ス

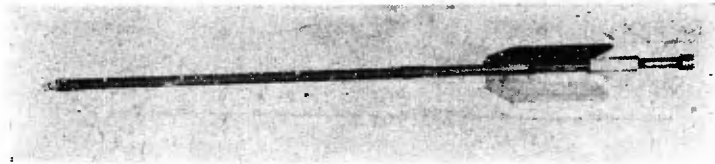
第一節 構造及機能

第二 羽付破壊筒(以下本破壊筒ト稱ス)ハ管体、信管、扇品竝ニ箱ヨリ成ル(第一圖、其ノ一、其ノ二)

1493

第一圖 其ノ一
羽付破損筒
全 体

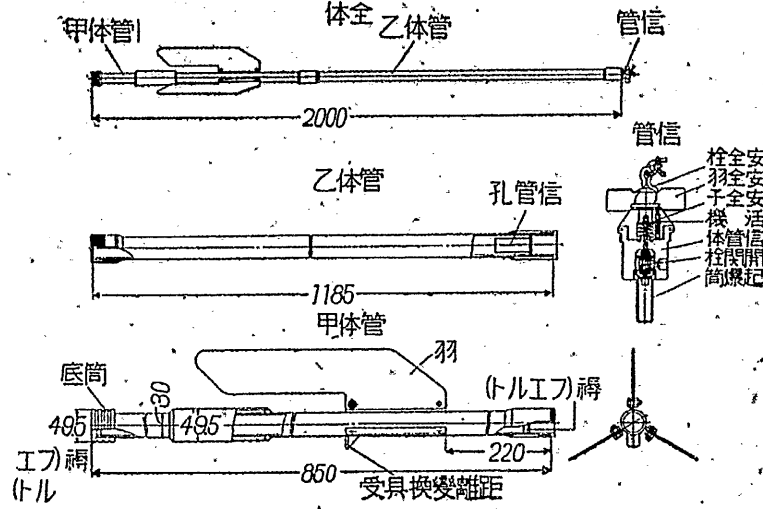
附録 羽付破損筒



二

1494

第一圖 羽付破環筒
全體



三

主要諸元次ノ如シ

全長 二米
重量 約八五〇〇

管体 徑 三五耗
肉厚 二・六耗

炸藥 二号淡黄藥二五〇直坂トス

投擲距離 近極限 約九〇米(拋射藥二五瓦)
遠極限 約二九〇米(拋射藥五〇瓦)

第三 管体ハ引拔鋼管製ニシテ甲、乙二体ヨリ成ル

甲ハ長サ〇米八五ニシテ羽(三枚ヨリ成ル)、羽取付板、距離變換具受ヲ有ス
羽ハ「ボルト」ニ依ル着脱式トス

乙ハ長サ約一米一八ニシテ九式破壞筒管体ニ同ジ

第四 信管ハ安全栓、安全羽ヲ有スル瞬發、延期ノ二働信管ニシテ鉄條網破壞ノ爲ニハ瞬發、輕掩蔽部破壞ノ爲ニハ延期ニ切換ヘテ使用スルモノトス

安全裝置ハ安全栓、安全子、安全羽ノ三段式トス

安全栓(安全裝置第一段)ハ投擲ニ際シ拔取ルモノニシテ安全子(安全裝置第二段)ハ投射衝擊ニ依リ自動的ニ離脱スルモノトス

附錄 羽付破壞筒

安全羽(安全装置第三段)ハ投射飛行中風壓ノ爲安全羽回轉離脱シ信管ヲ着発ノ姿勢ニ爲スモノトス

第五 属品ハ信管筒、「スバナ」、ねぢ回下シ本破壊筒三(一箱)ニ付「スバナ」ニ、ねぢ回一ヲ附ス

信管筒ハ信管ヲ收入スルモノ、「スバナ」ハ本破壊筒ノ羽ノ組立ニ又ねぢ回ハ信管ヲ延期ニ切換ヘル爲延期室ノ閉閉栓

ヲ廻ハスニ使用ス

第六 箱ハ本破壊筒三、信管(信管筒共)三、「スバナ」ニ、ねぢ回一ヲ收入運搬スルニ用フ

第二節 組立分解

第七 本破壊筒ノ組立ハ適宜ノ台上ニ於テ概ネ左ノ順序ニ行フモジトス

一 管体甲、乙ヲ接合ス

接合ニ方リテハ管体甲ノ端ニ在ル「フェルト」襷ヲ落脱セザルコト又管体ヲ手ニテ徐々ニ固ク縮メルコト必要ナ

リ

二、羽ヲ管体甲ニ取附ク

羽ハ標線(白ク塗りアリ)部ヲ管体ノ羽取付板ノ標線部ニ合セ「ボルト」ヲ以テ取附ケ固定ス

此ノ際羽ヲ変歪セザルコト特ニ必要ナリ

是羽ノ変歪セルモノハ彈道性著シク悪ケレバナリ

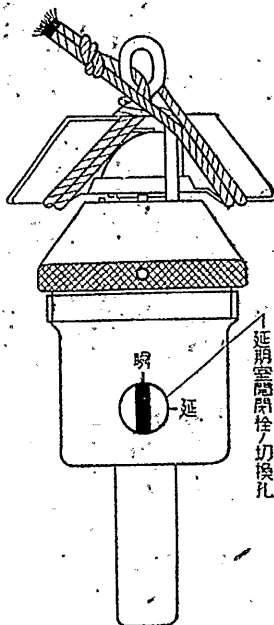
三 信管ヲ取附ク

信管ハ投擲直前ニ於テ管体ニ取附ケルモノニシテ輕ク徐々ニ結合スルモノトス

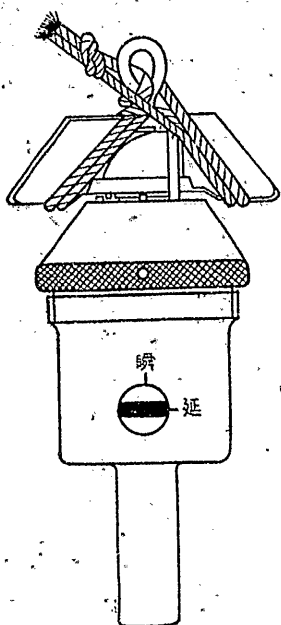
1497

第八 信管ハ瞬発ニ組立シアルヲ以テ瞬発トシテ使用スルトキハ其ノ儘ニテ可ナリ(第二圖、其ノ一)
 是ヲ延期ニ使用スルトキハ信管体延期室ノ切換孔ノ縁ニ「瞬」延」ノ文字ヲ刻ミアルヲ以テねぢ回ヲ信管体延期室ノ切
 換孔(錫ノ塞板ヲ以テ被フ)ニ入レ開閉栓(溝ヲ附シアリ)ヲ約九〇度右ニ廻シテ溝ヲ「延」ノ文字ニ合セル(第二圖、其
 ノ二)

第一ノ共



第二ノ共



附錄 羽付破接筒

三五

第九 分解ハ概ネ組立ノ反對順序ニ行フ

第十 信管ハ分解セザルモノトス

第十一 本破壊筒ハ管体乙ノミヲ接続シテ九九式破壊筒ニ準ジ使用スルコトヲ得
此ノ際ニ於ケル起爆ハ雷管ニ依ル

第三節 注意事項

第十二 本破壊筒ハ次ノ缺点アルモノハ之ヲ投擲スベカラズ

- 一 管体甲、乙ヲ接続シタルトキ其ノねぢ部ガ著シク緩クガタガタスルモノ
 - 二 管体甲、乙ヲ接合シタルトキ其ノ中心線ガ一致セス接合部ニ於テ屈曲シアルモノ
- 第十三 本破壊筒ハ抛射薬(小粒薬)五〇瓦以上ヲ以テ投擲スベカラズ
- 第十四 信管ハ安全栓ヲ抜キタル後安全羽ヲ手ニテ廻ハスベカラズ

第四節 保存

第十五 保存ニ関シテハ防湿ニ注意スベシ

第三 導火索点火管

1499

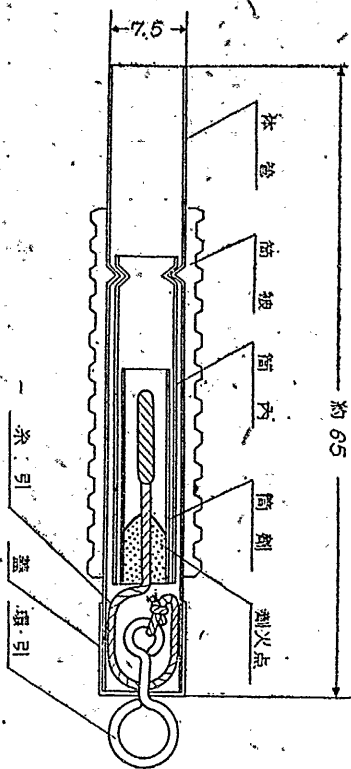
総説

第一 導火索点火管ハ緩燃導火索ノ一端ニ接合シ緩燃導火索ニ点火セシムルニ使用ス

第一節 構造及機能

第二 導火索点火管(以下点火管ト称ス)ハ管体、蓋、被筒、内筒、内筒剝筒、点火劑及引糸ヨリ成ル其ノ構造左圖ノ如シ

管 火 点 索 火 導



附録 導火索点火管

管体ハ黄銅製円筒ニシテ前端ニ緩燃導火索ヲ挿入スルモノトス
蓋ハ管体ノ蓋ニシテ引環ヲ有ス

被筒ハ「フアイバー」製円筒ニシテ管体ノ外部ニ装着セラレ点火管ヲ使用スルトキ握ルニ供ス
又投擲爆裂罐ノ点火具ニ使用スルトキハ鉄線若クハ糸ヲ巻附ケスルニ供ス

第三 内筒ハ黄銅製円筒ニシテ管体ニ固定セラレ劑筒ヲ收容スルモノトス

第四 劑筒ハ点火劑ヲ填実スルニ供ス

第五 引糸ハ一端ニ摩擦劑ヲ塗リ他端ヲ蓋ノ引環ニ結附ケタルモノニシテ引糸ヲ引クコトニ依リ点火劑ト摩擦シ発火
スルモノトス

第六 本点火管ハ四〇筒ヲ一箱ニ收入ス

第二節 保存

第七 保存ニ関シテハ湿気ヲ含マザル如クスベシ

第四 点火マツチ

総説

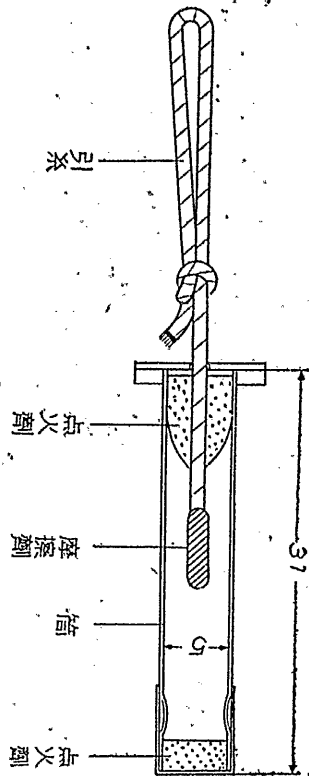
第一 点火「マツチ」ハ九八式投擲機ノ点火孔ニ挿入シ拋射藥ヲ發火セシムルニ使用ス

1501

第一節 構造及機能

第二点火「マッチ」ハ筒、点火劑、引糸ヨリ成ル
其ノ構造左圖ノ如シ

チ ャ ヲ 火 点



筒ハ「ファイバー」製田管ニシテ点火劑ヲ填實ス

第三 引糸ハ其ノ一端ニ摩擦劑ヲ塗リタルモノニシテ引糸ヲ引クコトニ依リ点火劑ト摩擦シ發火スルモノトス

第二節 保存

附録 点火マッチ

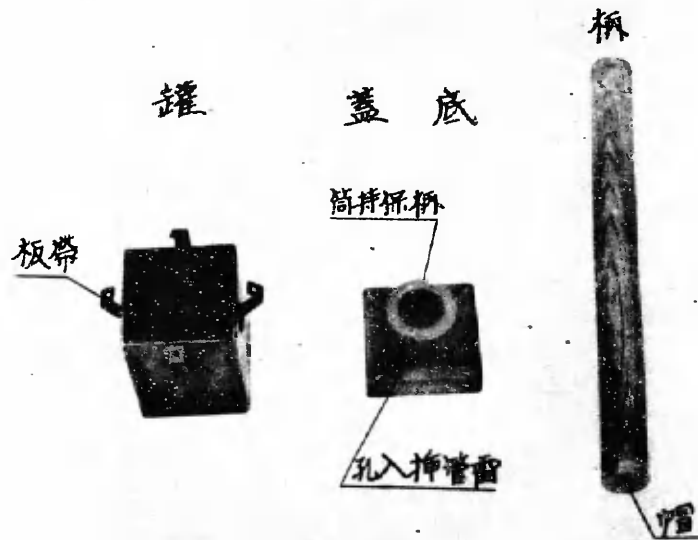
1502

- 第四 点火「マツチ」ハ五〇箇ヲ一箱ニ收入ス
- 第五 保存ニ関シテハ湿度ヲ含マザル如クスベシ

1504

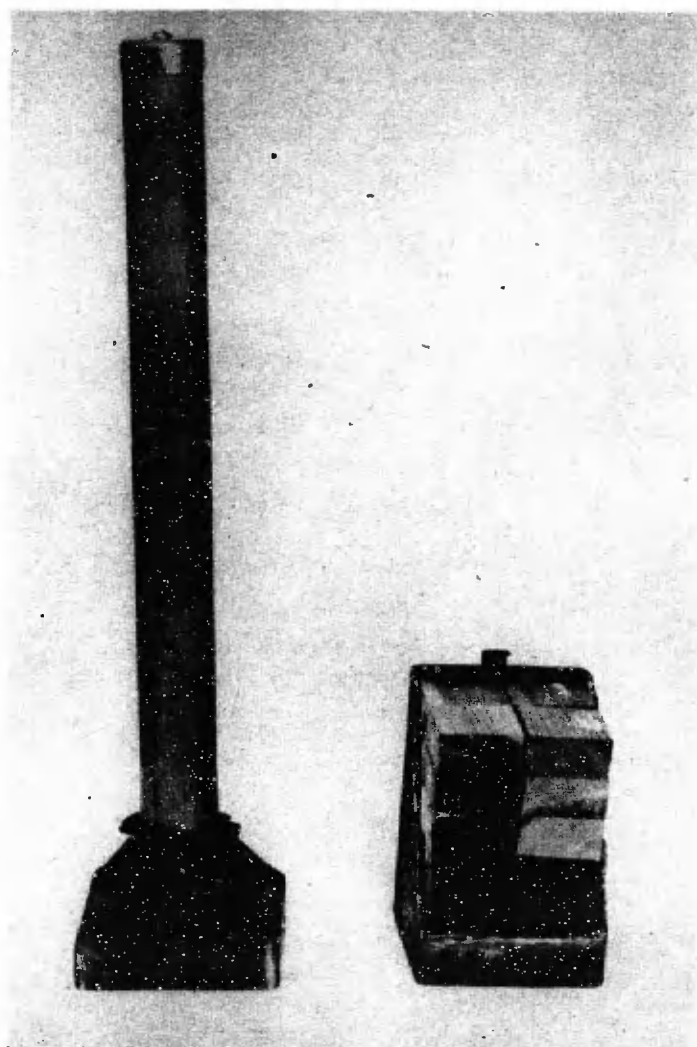
第一圖 其二

ウチノケバクマレ
投擲炸裂罐



1505

第 二 圖
黃 色 藥 方 之 要 領



1506

第三圖

點火器具ノ取附要領

點火器具

